JAPAN SPORT
COUNCIL

クリーンでフェアなスポーツを守るために

ドーピング
通報窓口

トップアスリートのための
暴力・ハラスメント
相談窓口

ドーピング通報窓口は、
どなたでも、とく名でも
ご利用できます。
◀ まずはサイトをチェック

トップアスリートの皆様、
ひとりで悩まずにご相談ください。
◀ LINE から相談

すべての
スポーツに
エールを

スポーツくじの収益は、
日本のスポーツを育てるために
使われています。

くじを買うはエールになる

スポーツくじ WINNER toto BIG

19歳未満の方の購入又は譲り受けは法律で禁じられています。払戻金も受け取れません。運営・販売：独立行政法人日本スポーツ振興センター

HPSCニュースレター 2023 Vol.37 ／ 令和5年3月発行
編集・発行：独立行政法人日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター
〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1
https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/
HPSC JAPAN HIGH PERFORMANCE SPORT CENTER
JAPAN SPORT COUNCIL

JAPAN SPORT
COUNCIL

HPSC NEWS LETTER

JAPAN HIGH PERFORMANCE
SPORT CENTER NEWS LETTER

HPSC JAPAN HIGH PERFORMANCE SPORT CENTER

2023 VOL. 37

特集

ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス2022

- 関係機関との連携・協働に関する取組
- Journal of High Performance Sport (JHPS)
- オリンピック・パラリンピックを見据えた
  競技団体の中長期戦略を推進するための取組

ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス2022

～ Research for Evidence-based Support ～

ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）では、日本のハイパフォーマンススポーツにおける競技力向上及びそれに寄与する取組を推進するため、年１回「ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス」を開催し、HPSC における各事業の取組や知見の紹介、国内外のハイパフォーマンススポーツに関する情報・先進事例の提供等を行っています。
2022 年度は HPSC が蓄積してきたナレッジや新しい知見・技術を科学的根拠に基づいた支援につなげていくために「Research for Evidence-based Support」をテーマとして設定し、HPSC だからこそ実現できる情報発信を目指しました。

セッション概要

Session 1
**メディカルチェックおよび診療データから
スポーツ外傷・障害の傾向と予防について再考する**

<モデレーター> 西田雄亮（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
<出演者> 半谷美夏（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
橋本立子（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）

Session 2
**スポーツ現場における新型コロナウイルス感染症の動向
～HPSCでの検査データから～**

<モデレーター> 小松裕（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
<出演者> 蒲原一之（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
福嶋一剛（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
友利杏奈（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）

Session 3
**アスリート支援強靭化のためのシステム構築
-低酸素環境下での高強度インターバルトレーニングの効果と活用-**

<モデレーター> 山下大地（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）
<出演者> 山岸卓樹（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）
笠井信一（愛知淑徳大学）
Franck Brocherie（INSEP）

Session 4
フィットネスを評価する意義の再考

<モデレーター> 窪康之（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）
<出演者> 松林武生（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）
亀田麻依（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）
大石益代（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
笹代純平（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）

Session 5
アスリート育成パスウェイを研究する

<モデレーター> 衣笠泰介（HPSC ハイパフォーマンス戦略部）
<出演者> 伊藤陽一（埼玉県県民生活部スポーツ振興課）
豊田太郎（ベースボール＆スポーツクリニック）
後藤晃伸（中京大学）

Session 6
女性アスリートの育成・強化の段階に応じた女性の健康課題と支援

<モデレーター> 友利杏奈（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
<出演者> 宮本由記（総合青山病院産婦人科・HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
小口貴久（公益財団法人日本オリンピック委員会）
原田紗希（慶應義塾大学）

Session 7
HPSC研究アワード受賞講演

<モデレーター> 尾崎宏樹（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）
<出演者> 宮本直和（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）
安藤良介（HPSC/JISS スポーツ科学・研究部）

Session 8
**スポーツ脳震盪
-カナダ・日本から見える課題と展望 -**

<モデレーター> 福嶋一剛（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）
<出演者> Brian Benson（Canadian Sport Institute Calgary）
中山晴雄（東邦大学医療センター大橋病院）
笹代純平（HPSC/JISS スポーツメディカルセンター）

※敬称略

Session 1 メディカルチェックおよび診療データからスポーツ外傷・障害の傾向と予防について再考する

近年、スポーツ外傷・障害の分野においては、いかに外傷・障害の発症を予防できるかが重要なテーマとなっています。そして、その最初のステップは、外傷・障害調査による実態把握です。本セッションでは、HPSCスポーツメディカルセンターの医師が、これまでスポーツメディカルセンターが実施してきた国際総合競技大会派遣前のメディカルチェック（MC）及び診療データに基づいて、代表的なスポーツ外傷・障害の特徴や傾向を紹介し、その予防へ向けた道筋や課題について報告しました。
まず、今回のデータの概要や件数（MCのべ10,000件、診療のべ50,000件以上）と、部位別では膝関節、腰部、足関節、肩甲帯の外傷・障害が多いことを紹介しました。続いて、HPSCの半谷が、腰仙部の障害として腰椎分離症と椎間板変性/ヘルニアを中心に紹介し、「競技特性を踏まえた対応と、分離症治療の重要性を啓発していくことが必要」と述べました。続いて、HPSCの橋本は、膝前十字靭帯損傷について、その受傷機転やリスク因子の考察を踏まえ、MCで実施しているアライメント等の測定を用いた研究について紹介しました。HPSCの西田は、膝蓋腱症及び肩甲帯の外傷・障害の好発競技などを示し、それぞれの動作特性から次のステップである発生機序やリスク因子の解明へとつなげる必要性について強調しました。そして、現在進行中の研究やプロジェクトについて紹介し、「多分野の専門家や現場スタッフの協力が不可欠であり、連携して研究と実装を進めていきたい」と締め括りました。

西田雄亮

半谷美夏

橋本立子

Session 2 スポーツ現場における新型コロナウイルス感染症の動向 ～HPSC での検査データから～

東京2020大会及び北京2022大会を控える中で、COVID-19の世界的な大流行が起きました。このような状況下で、トップアスリートの強化拠点であるHPSCにおいて、利用者にできるだけ安全にHPSCを利用してもらうためにとった対応策について検証しました。HPSCの蒲原が東京2020大会及び北京2022大会の前後でHPSC利用者に対して実施したスクリーニング検査の結果を示して検討し、今後の対策案について考えを述べました。また、一般に罹患後の後遺症に苦しむ方も多い中、COVID-19罹患後のトップアスリートの特徴について検討し、COVID-19罹患後アスリートの競技復帰についても議論しました。HPSCの福嶋が主として心臓関係の検査結果についてまとめ、HPSCの友利が呼吸器関係の検査結果についてまとめました。日本臨床スポーツ医学会では、COVID-19罹患後の競技復帰に際して、復帰時期や復帰前に推奨される検査についての指針を示していますが、これは合併症や後遺症のリスクを極力減少させることに主眼を置いたものとなっています。重要な試合が目白押しであるトップアスリートにおいては、可能な限り早期の競技復帰を希望することが多いため、HPSCの小松は、今後HPSCが中心となって新しい指針を作成することが望ましいと締め括りました。

小松裕

蒲原一之

福嶋一剛

友利杏奈

Session 3 アスリート支援強靭化のためのシステム構築 －低酸素環境下での高強度インターバルトレーニングの効果と活用－

HPSCでは、スポーツ庁から受託した「スポーツ支援強靭化のための基盤整備事業」の一環として、アスリートが置かれている様々な状況に対処し、トレーニング効果を最大化するためのプロジェクトに取り組んでいます。その中でも近年、低酸素環境下での高強度トレーニングに注目が集まっていますが、必ずしもそれらの科学的背景や意義が適切に理解され、実践されているとは言えない状況です。本セッションでは、まず、HPSCの山岸より高強度インターバルトレーニングの基礎的知識について、次に愛知淑徳大学の笠井氏より低酸素スプリントトレーニングの効果について、最後にINSEP（国立スポーツ体育研究所、フランス）のブロシュリ氏より環境ストレスと生理学的パフォーマンスの関係についての講演をしていただき、総合討論を行いました。本セッションでは、登壇者自身の発表論文を中心に、高強度/低酸素トレーニングの科学的背景から実践例まで、現場で役立つ知見が惜しみなく提供されました。さらに、低酸素トレーニング研究の世界的第一人者であるブロシュリ氏からは、低酸素環境にとどまらず、暑熱や加圧など様々な環境ストレスを付加した際の生理学的適応について最新の知見を提供していただきました。本セッションをきっかけに、高強度/低酸素トレーニングの正しい知識が普及し、日本人アスリートの国際競技力の更なる向上につながることが期待されます。

山下大地

山岸卓樹

笠井信一

フランク・ブロシュリ

Session 4 フィットネスを評価する意義の再考

国立スポーツ科学センター（JISS）では、アスリートの国際競技力向上のための医・科学サポートの一つとして、「フィットネス測定」を提供しています。フィットネスとは広義的に体力を定義した言葉であり、競技力の基礎となる重要な要素と言えます。測定を通してフィットネスを評価して課題を見つけ、見つかった課題を解決するためのトレーニングを提供し、その効果を検証する。これがJISSの考える基本的なサポートのサイクルです。近年、これらのサポートを利用してくださるアスリート、特にこの5年はパラアスリートに利用いただく機会が増えています。同時に、個々の課題や求められるフィットネス評価及びトレーニングも多様化してきました。個別性の高い対応が必要である一方、評価を提供するためには共通した方法を用いて基準を設定する必要があり、この過程はパラアスリートへの対応だけでなく、全てのアスリートを対象としたフィットネス測定において重要な課題となっています。本セッションでは、フィットネス測定と評価を提供する研究員及び、トレーニングやリハビリテーションを提供するスタッフが登壇し、フィットネス評価をより有効に活用していくためにはどうすれば良いかを議論しました。各競技におけるパフォーマンスの構成要素や構造を理解した上でフィットネス評価を実施し、そこで洗い出された課題や課題解決のためにどのようなトレーニングが必要であるか、アスリートやコーチとサポートに関わる者全員が共有して取り組んでいくことが重要であるということを改めて確認する良い機会となりました。

窪康之

松林武生

亀田麻依

大石益代

笹代純平

Session 5 アスリート育成パスウェイを研究する

衣笠泰介

伊藤陽一

豊田太郎

後藤晃伸

2004年に始まった我が国の地域タレント発掘・育成（TID）事業は、現在ほぼ全国に広がり、アスリートがスポーツに触れてからトップアスリートに至るまでの過程「アスリート育成パスウェイ」の入口を支えています。本セッションでは、これらの事業で得られたデータや知見を一元化し、様々な視点から研究に取り組む「アスリート育成パスウェイ研究会（AP研究会）」の設立背景と研究の概要、進捗について紹介しました。AP研究会参加者は、TIDに関係している研究者や地域で実際にTID事業に関わっている実践者などで、現在3つのテーマでワーキンググループを構成しています。今回はHPSCの衣笠をモデレーターとし、「競技選定の方法に関する研究」について埼玉県県民生活部スポーツ振興課の伊藤陽一氏より、「TIDの手法に関する研究」についてベースボール＆スポーツクリニックの豊田太郎氏より、そして、「アスリート育成パスウェイを支える組織体制に関する研究」について中京大学の後藤晃伸氏よりそれぞれ発表していただきました。AP研究会は、これまで地域で実践されてきたTIDについて、それぞれの地域で得られたデータを一つにつなぎ合わせ、エビデンスとして発信していく予定です。衣笠は、実践・支援と研究との両輪で、我が国におけるアスリート育成パスウェイの促進要因と阻害要因を明らかにし、エビデンスを基にした政策の提言につなげたいと結びました。

Session 6 女性アスリートの育成・強化の段階に応じた女性の健康課題と支援

友利杏奈

宮本由記

小口貴久

原田紗希

HPSCでは、2013年度より、文部科学省及びスポーツ庁委託事業として、女性アスリート支援プログラムを行っています。主に、成長期女性アスリートの健康課題、妊娠出産を経て競技復帰を目指すアスリートへのトータルサポートを実施しています。本セッションでは、HPSCの友利をモデレーターとして、本事業でジュニア期をトータルサポート（トレーニング、心理、栄養）したフェンシング女子エペ原田紗希選手の幼少期からのパスウェイを紹介しました。原田選手は、2021年には国内ランキング1位となり、学業では法科大学院に通いながら競技生活を続けています。事例を通して、婦人科医の宮本氏、JOC EA（エリートアカデミー）ディレクターの小口氏と共に、女性アスリート支援について育成・強化の段階ごとに検討しました。宮本氏からは女性アスリートに関する最新の知見、オリンピック出場選手等の婦人科調査についての紹介、小口氏からはJOC EAでの実際のジュニア期のアスリートへの取組についてもご紹介いただきました。パネルディスカッションでは、原田選手から、今後の競技人生の将来像について、パリ2024大会出場、ロサンゼルス2028大会でのメダル獲得、並行して法曹界でのキャリア、妊娠出産後の選手としての復帰、と具体的な目標を伺いました。本セッションを通して、女性アスリートに関わる方々が、それぞれの地域、立場、活動においてどのような支援を実施すべきかを考える一助になることが期待されます。

Session 7 HPSC 研究アワード受賞講演

尾崎宏樹

宮本直和

安藤良介

HPSCでは、トップアスリートの国際競技力向上のための支援を行うとともに、コーチやアスリートが抱える様々な課題を解決するため、ハイパフォーマンススポーツ研究を推進しています。この研究活動の中で、優秀な研究員を表彰するため、2020年度にHPSC研究アワードが創設され、各年度、最も多く論文を公表した研究員に対し、このアワードを贈っています。第1回目のアワード受賞者は北海学園大学の内藤貴司氏でしたので、内藤氏の2020年度の研究業績をご紹介しました。また、2021年度HPSC研究アワードを受賞した、HPSCの安藤より、アワード受賞の対象となった3編の論文に掲載されている、筋の硬さに関する研究について説明しました。2022年度、日本スポーツ振興センター（JSC）と包括連携協定（MOU）を結んでいる順天堂大学より、宮本直和氏に副主任研究員として、現在HPSCにご出向いただいています。宮本氏は筋の硬さに関する研究分野において、国内外で著名な研究者でありますので、この機会に、宮本氏のこれまでの研究成果についても発表していただきました。安藤と宮本氏の発表の中で、競技現場でよくある筋の硬さに関する誤解、ストレッチと筋の硬さとの関係、適切なストレッチの方法など、競技現場にとって有用な話題を多く提供していただきました。

Session 8 スポーツ脳震盪 －カナダ・日本から見える課題と展望－

福嶋一剛

ブライアン・ベンソン

中山晴雄

笹代純平

2022年10月、第6回となる国際スポーツ脳震盪会議がアムステルダムで6年ぶりに開催されました。近年のデータを反映した定義づけなど新たな提示もみられましたが、脳震盪の評価として単一指標のみの判断は依然困難であり、総合的判断が求められることに変わりはありません。今回、脳震盪研究の権威であるカナダ・スポーツ研究所カルガリー、チーフメディカルオフィサーのブライアン・ベンソン氏に国際的な脳震盪の取組、カナダにおける実際の診療過程などをご紹介いただきました。本邦からは東邦大学医療センター大橋病院脳神経外科　中山晴雄氏にご登壇いただき日本での脳震盪診療を通しての課題について、また、HPSCの笹代よりパラアスリートにおける脳震盪予防の取組について紹介いただきました。ロボット技術を用いた客観的評価や、多職種連携によるケアチームの重要性など専門家ならではのトピックについても説明があり、これからの脳震盪診療が進歩していく可能性を感じられる内容となりました。スポーツ関連脳震盪を取り巻く環境改善のためグラスルーツからの教育・啓蒙がきわめて重要であり、今セッションを通して1人でも多くのアスリート関係者がスポーツに関わる脳震盪の問題性と現状を認識していただくことで、次世代の調査・研究、診療につなげられることが期待されます。

カンファレンスの振り返りと HPSC のこれからについて

ハイパフォーマンススポーツセンター・国立スポーツ科学センター長の久木留が本カンファレンスのラップアップを行いました。「より多くの視聴機会を確保できるようオンデマンド配信で実施させていただいた。今後もハイパフォーマンススポーツ研究を推進するとともに、研究が支援の課題解決になるよう、また、支援の課題を研究に反映できるよう、今一度原点に立ちかえる意味も込め『Research for Evidence-based Support』というテーマを設定した。」と説明しました。今回のカンファレンスでは、フランスやカナダの連携機関からの登壇者をはじめとして、「各分野の第一線で活躍する外部の専門家にも多数ご登壇いただき、活発なディスカッションを含めHPSCならではの情報発信を行うことができた」と振り返りました。
カンファレンスの振り返り後、HPSCの展望についても説明をしました。HPSCの機能強化に努め、日本のスポーツの国際競技力向上に寄与していくことや、「HPSCは各事業で培った様々な科学的な方法等についての地域への展開などを行っているが、『ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ』として、社会への還元をより推進していく。」と、強調しました。続いて、「2034年までに、世界最高水準のスポーツ医・科学研究所となる」ことを掲げたJISSプラン2034の策定についての説明があり、最後にカンファレンスの実施にあたりご協賛、ご協力いただいた方々や企業・団体様への御礼を述べ、締め括りました。

久木留毅

カンファレンスを終えて

3年連続のオンライン開催となったハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス2022。好きな時間に好きな部分を視聴できるオンデマンド配信を行い、2021年度を上回る900名以上の方々にご視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ご登壇いただいた皆様に心より感謝申し上げます。なお本カンファレンスでは、トップパートナーである富士通株式会社様、株式会社JTB様をはじめ、10社の企業様からご協賛いただくとともに、関係団体の皆様にご後援いただきました。改めて御礼申し上げますとともに、引き続きHPSCの活動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

協賛企業様

FUJITSU
JTB 感動のそばに、いつも。
SHIDAX 未来の子供たちのために
Otsuka 大塚製薬
株式会社協栄
aim SERVICES
Senoh
MIZUNO
株式会社LSIメディエンス
Panasonic CONNECT

関係機関との連携・協働に関する取組

スポーツ基本法及びスポーツ基本計画の趣旨に則り、
大学や海外機関等とJSCが有する人的・知的資源の交流と物的資源の活用を図り、
相互に連携及び協力することで、日本のスポーツ振興及びスポーツ医・科学、情報等の
発展に貢献することを目的とし、連携協定を締結しています。

カナダ・スポーツ関連機関５団体との連携協定覚書を締結

2022年7月8日、カナダ・オタワにて、JSC芦立理事長、久木留理事出席のもと、カナダのスポーツ関連機関5団体（オウン・ザ・ボディウム、カナダ・オリンピック委員会、カナダ・パラリンピック委員会、カナダ・オリンピック・パラリンピック・スポーツ研究所ネットワーク、カナダ・コーチング協会）と、包括連携協定覚書を締結しました。
この協定に基づき、夏季・冬季オリンピック・パラリンピックスポーツの競技力向上への寄与、スポーツ界における女性リーダー輩出・育成支援、スポーツとSDGsの推進、コーチングなどの領域で、日本とカナダの連携を目的とし活動を行っていきます。

主な連携領域

- アスリートやチームのトレーニングや競技支援
- アスリートの育成
- コーチ及び技術指導者の育成
- スポーツ指導者・役員・スポーツ関係者の交流プログラム及び訪問
- スポーツ科学及びスポーツ医学関係者のための研修及び情報交換プログラム並びにスポーツ科学の発展における協力
- 安全なスポーツ、スポーツ教育、スポーツマネジメント、スポーツ研究所及びトレーニングセンター分野における研修及び情報交換プログラム
- スポーツ分野における情報及び研究の開発のための技術・インフラ及びプログラムの分野における研修及び情報交換
- スポーツ分析
- オリンピック・パラリンピック競技大会プロジェクト、及び本覚書の枠組みの中で、相互の利益のために適切かつ必要とみなされるその他の分野および題目

MOU締結後の連携第一弾として、カナダ・スポーツ研究所カルガリーのチーフメディカルオフィサーで、カナダの脳震盪研究の第一人者であるブライアン・ベンソン氏より、ハイパフォーマンス・スポーツ・カンファレンス2022において、基調講演、パネルディスカッションにオンラインでご参加いただきました。
今後も、競技力強化にむけて、カナダとの様々な連携の機会が期待されます。

カナダ・スポーツ研究所カルガリー
チーフメディカルオフィサー
ブライアン・ベンソン氏

フランスINSEPとの取組

JSCはフランスを代表するエリートアスリートの強化拠点である国立スポーツ体育研究所（INSEP）と2014年にMOUを締結しており、HPSCでは近年、特に研究における連携が進んでいます。連携の具体的な事例を紹介させていただきます。

● トレーニング分野

トレーニング分野では、トレーニングの最適化というテーマについて、INSEPとHPSC双方の関心が高いことから、2022年12月4日から8日の5日間、INSEPよりフランク・プロシュリ氏とジャン・スラウィンスキ氏の2名を招へいしました。プロシュリ氏にはハイパフォーマンススポーツ・カンファレンスに登壇いただき、様々な環境ストレスを付加したトレーニングの効果について知見を提供していただきました。
また、スラウィンスキ氏とは共同研究のための動作解析機器とプロトコルの確認を行いました。そのほかにも、両氏とは様々な分野の研究員と多くのディスカッションを行うなど、両機関が行っている研究や支援の内容について最新の知見を得るとともに今後の有用な情報交換をすることができました。

● 栄養分野

栄養分野では、2022年7月にINSEPから栄養分野の研究と支援を担当されているエヴ・ティオリエ氏をはじめスポーツ栄養士の方がHSPCに来訪した際、HPSCが行う栄養に関する研究・支援の概要等について紹介しました。その後、共同研究の可能性についてオンライン会議を行っているところですが、引き続き定期的にミーティングを行い、INSEPとJISSの特長を生かした、国際競技力向上に役立つ具体的な共同研究の内容を決めていく予定です。

● 心理分野

心理分野では、INSEPのスポーツ心理学者と共同研究のミーティングをスタートし、最初にHPSCが行った東京2020大会に向けた「自国開催のプレッシャー対策」の研究（特別PJ研究）の成果について説明したところ、興味を持っていただくことができ、双方にとって良いディスカッションができています。

HPSCでは今後もINSEPをはじめ海外機関との連携を通じて、国際競技力の向上に係る様々な取組を行ってまいります。

Journal of High Performance Sport (JHPS)

**Journal of High Performance Sport（JHPS）は、ハイパフォーマンススポーツにおける競技力向上への医・科学的貢献を目指す研究雑誌です。その内容には、強化現場に直結する応用的・実践的なものから、将来活用の見込まれる研究までが含まれています。
さらに、トップアスリートのような特異的な対象者に焦点を当てた実践研究やその特性を探究する研究、医・科学サポートに関する事例・症例の報告や研究資料も扱っています。**

トップアスリートの競技力向上に関わる研究

JHPSは、「研究成果が国際競技大会で活躍するトップアスリートの競技力向上に貢献できるか」という点に関して、特に重視した学術誌であるということが他の学術誌との大きな違いとなっています。JHPSへの投稿は、トップアスリートがトレーニングを行うナショナルトレーニングセンターと支援・研究を一体となって行うJISSを有するHPSCだからこそ蓄積される知見もあるため、HPSCに所属している方を中心に、中央競技団体（NF）の医・科学スタッフである各大学の先生やその大学院生等にも多く投稿をいただいています。また、過去にJISSに所属していた方で大学に就職した方、NFの医・科学スタッフになった方などにもJHPSに投稿していただいています。

豊富な収録論文数

現在JHPSには、2022年12月時点で79本の論文が収録されており、JHPSの前身であるJAPANESE JOURNAL of ELITE SPORTS SUPPORTやSports Science in Elite Athlete Supportを含めると123本の論文を収録しています。現在のJHPSという研究雑誌となってからは、総説、原著論文、事例・症例報告、研究資料、短報の5つの論文種類から成り立つ通常号とHPSCが事業の一環として取り組んでいることや、ハイパフォーマンススポーツ分野におけるトレンド・トピックの紹介などを行う特集号という形で1年に2冊の発刊を行っています。
2022年は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に関するサポート特集というテーマで、JSC村外サポート拠点、暑熱対策プロジェクト、自国開催大会の心理対策プロジェクトについて、特集号を発刊しております。また、JHPSの目的の一つでもある研究成果を更なるトップアスリートの競技力向上に幅広く活用してもらうため、各NF、全国にある体育・スポーツ系大学、地域の医・科学スポーツセンター、各都道府県のスポーツ協会等に冊子を配布しています。加えて、HPSCのホームページにおいても公開することによって広く知見を還元していく取組を行っています。

通常盤 総説、原著論文、事例・症例報告、研究資料、短報の5つの論文種類。

特集号 ハイパフォーマンススポーツ分野におけるトレンド、トピックの紹介。

これからのJHPS

今後、JHPSがハイパフォーマンススポーツにおける競技力向上への医・科学的貢献を更に進めていくためには多くの研究の投稿がされること、また、多くの方に目にしてもらうことによってJHPSの価値を高めていくことが重要だと考えております。そのために、HPSCではJISSの研究員を中心としたJHPS編集委員会において、定期的に議論を行い、HPSCだからこそできる研究雑誌を目指しています。

論文内容や投稿・執筆要項はウェブサイトから

HPSC JHPS

https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/about/publications/tabid/1294/Default.aspx

オリンピック・パラリンピックを見据えた競技団体の中長期戦略を推進するための取組

～協働チームによる強化戦略プランの実効化支援～

2016年10月にスポーツ庁により「競技力強化のための今後の支援方針（鈴木プラン）」が公表され、我が国のスポーツにおける競技力強化とその持続化を目指す取組が始まりました。そこで、NFが策定する「強化戦略プラン（直近及び2大会先のオリンピック・パラリンピック競技大会を見据えた中長期計画）」の実効化を支援するために、日本オリンピック委員会（JOC）、日本パラスポーツ協会（JPSA）日本パラリンピック委員会（JPC）、JSCで構成される「協働チーム」が設置され、スポーツ庁や日本スポーツ協会（JSPO）と連携の上、強化戦略プランを軸としたPDCAサイクルの各段階に対する支援活動を通じて、競技団体の育成・強化システムの確立を推進し、国際競技力の向上に貢献する活動を行っています。本誌では、JSC協働チーム事務局（HPSCハイパフォーマンス戦略部の谷川徹朗、夏見円、山田香）が、今後の支援活動について意見交換した内容を掲載します。

2016年協働チーム設置時のエピソードについてお聞かせください。

谷川 協働チームが設置され6年目を迎えました。2001年のJISS開所当初よりオリンピック競技においてはスポーツ医・科学支援に取り組み、NFとのネットワークが構築されていましたが、パラリンピック競技は厚生労働省から文部科学省への移管後のタイミングとなり、当時ネットワークが全くなかったためJPCの事務局（強化担当者）の方と一緒に現場に足を運び関係性の構築に努めました。長年の努力の甲斐もあり、NFを支援する団体間で連携する関係性や体制を構築することができたという点で、協働チームの役割は非常に大きいと感じています。

山田 強化戦略プランにはNFにとって国際競技力の向上に必要な要素（目標やマイルストーン、アスリートやコーチ、練習環境〈強化拠点〉等）が記載されます。当時、オリンピック競技のNFには中長期計画の策定経験がありましたがパラリンピック競技のNFには経験がなかったことから、NF全体に対する説明会の開催やNF個別の策定支援を実施するなど工夫をしてきました。NF内の理解や浸透具合に差はありますが、強化戦略プランは関係者間の共通言語として徐々に活用されてきています。

活動を通じて感じることがあれば教えてください。

夏見 活動当初は目標達成に必要な要因の特定や課題の捉え方などに迷われる方もたくさんいらっしゃいましたが、毎年の更新を重ね少しずつNF内の課題も精査されるようになりました。また、NFとの関係性も構築できてきたことで「まずは協働チームに問い合わせてみよう」という窓口としても機能してきたと感じています。

谷川 窓口機能もそうですが、NFからは「中長期を見据えた強化方針の可視化と、関係者間の共有が可能となった」という声を耳にすることもあります。強化戦略プランという共通言語に基づき、NFの育成・強化活動におけるPDCAサイクルが徐々に可視化され、関係者間の理解が深まってきているように感じています。

夏見 PDCAの検証（Check）段階では、2016年リオ大会後から「協働チームによるコンサルテーション」を開催しています。年に1度の振り返りとして、NFの強化責任者等と協働チームが相互に話し合い、強化戦略プランの目標達成に向けた取組の確認や、課題解決につながる情報提供を行っています。NFからも「第三者によるアドバイスは新たな気付きが多く、貴重な機会」とのコメントをいただくなど、NFの強化活動を協働チームと共に振り返る仕組みが構築できました。

山田 これらの取組を通じて、NFだけでなく我々も直近のオリンピック・パラリンピック競技大会に加え2大会先を見据えた中長期計画を意識できるようになりました。日本版FTEM（JSCが開発したアスリート育成パスウェイを整理するための枠組み）なども活用し、アスリートを育成する仕組みやNFを支援する体制が構築されつつあります。

今後に向けてNFから協働チームに対し求められていることはありますか。また今後の課題があればお聞かせください。

山田 これまで共通の課題に対してワークショップを開催し情報提供等を行ってきました。同じ課題を抱えるNF同士の連携については、少しずつニーズも増えてきました。コロナ禍も落ちついてきた中、課題が明確であることが前提となりますが、オリンピック・パラリンピック・夏季競技・冬季競技の垣根を越えたNF同士の連携も引き続き進めていきたいです。

夏見 協働チームにはNFの課題解決への更なる貢献や継続的な支援が求められています。そのため、協働チームのスタッフの資質向上も課題で、多岐にわたる情報にアンテナを張り、常にアウトプットしていくことが重要です。競技力向上には組織力の向上も求められます。我々も努力を続けていきますので、NFの皆様にもご尽力いただきたいと思います。

谷川 時代の流れに即した対応が求められているため、我々も歩みを止めることなく変化し続けることが必要だと考えています。協働チームによる支援活動を通じて、NFにおける中長期を見据えた育成・強化システムの更なる構築を目指すとともに、国際競技力向上に貢献できるよう、様々な活動に引き続き取り組んでまいります。

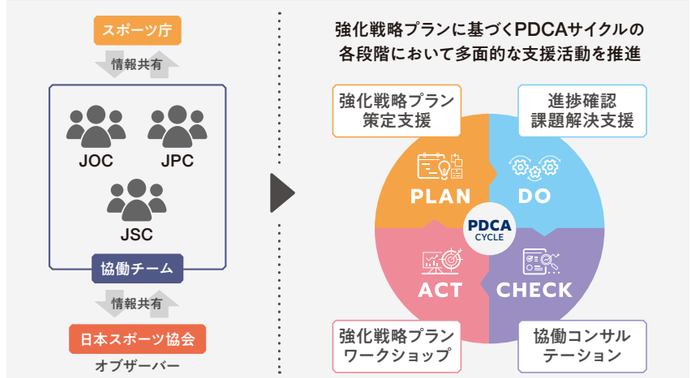
―ありがとうございました。

日本版FTEMの詳細はこちらから

FTEM JSC

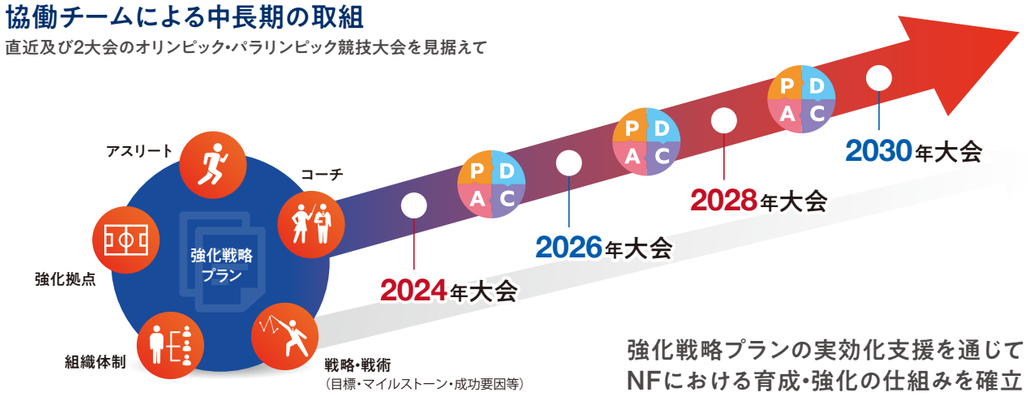
https://pathway.jpnsport.go.jp/ftem/index.html

協働チームの支援活動



協働チームによる中長期の取組

直近及び2大会のオリンピック・パラリンピック競技大会を見据えて



強化戦略プランの実効化支援を通じてNFにおける育成・強化の仕組みを確立

協働チーム事務局（JOC／JPC）からの声

組織間（JOC／JPC／JSC）で何度もミーティングを行い、時には現場に一緒に足を運ぶことで、協働チーム事務局としての関係性を構築してきました。1つの組織では解決できないNFの課題に対し、役割分担を明確にしながら、関係者が一丸となって一体的な支援ができるようになってきました。

（左から）鈴木和馬、室井美香、秋葉将秀

（左から）竹下泰史、仲前信治、伏見みずき